田

乃嵐

へ 5
1377

稱月亭　鬼剞

刹 4377 門 號 番

俳言の志律のあるを慮り
用捨し荒鳥哉旅泊乃
伽とし字一瓶千若芸言紀
芭蕉翁の正風晋子かわ
二の種雪中と積源哉巴人師
走漏りを諸ん之花洛月
石もとちる世之事之一句流を

くさ丙年あり堂ま門生杜江
記し置根下越さすす今也
文壁のぬし也津羅ちする
昔席を借れ乃尺謝せ
なりき言版題詞板を得
より序跋有称し玉ん友
をも未だ為らんと来る事て小

冊を作り四乃巌とやうハ巳
このとのたすも 断翅乃有径
有物よひ風ふおもえなく枝
葉のうち南飛義 栄えん
来きもと初るを一葉乃発
端ふその銘きをと告帰辞
十除有 取るべ 青蘿筆

梢上を活芳旦とつき哉
うしろよりおろし岳のり
宮鈴庵出

飛呂吉紀や花咲くの
出羽れ種
東武 初夏

妻を淸み秋を魚て
宮鈴庵乃筆紫の訓
詞のよ乃影うつり
魚の藻様ひ菊影り 魚てやまたれハ
楳几菴
松江

芸の世中
趣をたのしむ
田林嵐

至節　　臺旭子

天の戸の速くひらくや福寿草

仲春

楽く千句ありふ生しも　　巌水子

家小八清そ雲も深くん梅もおほし

雷ハ櫓ー鞁ナリ梅ー雨

洞家に賀

黄金能川洞し道にそのをり紙　御射山翁 羅人

枝清し実にみのり桃でる子の花　松下庵 嬰利

歓多花奥枝深しな志之　鳥車園 五始

花一本能玉あり兩乃皺　栄泉亭 鈴山

咲し出同つ小おひて
水臭乃かほらひかき八
折水に清く揉や流きとろこ　畐月庵 鉄鐸

令二

晴綾乃て名子に河萱乃若葉尓　指月舎 夕可

咲芙蓉の名も松に花鈴う那　菊坡

友垣乃道にをひこ遠き松乃花　魚道

末帆子寒芙蓉咲松花江己慶之　荊玉

令三

名八高く雲井尓響く雲雀哉　燕石

幾久し常葉松に花の数　無住

千代かけてまた川に岸る桜かな　允寂

咲ぬ咲らんむりに新樹や花つゝき　松助

花乃香は四方に吹きけり春の風　敛草

井桁に嫁か桜か菜の花　松阿

花満て廻る春心言葉かな　筆和

ふと色香もれんに咲隔テ初桜　賢雅

寄紀ゐる子香ひ出桃末を暮ことり　嵐笠

咲かゝり梢下もし花ひらくる　梅葉舎 志樂

名鳥を常なるにまた川乃花蔭　長流

待かねて軒ふんや菜花のかけ　芝月

目さらし吹藤ハ初度訓よ　嘯山

令 四

水鶏や清たかさしやむたく蛙　寛留

浮鮎ハ流乃井他へ移る哉　片路

いやましに云葉の花そ桜人　烏暁

秀ハ照ル語りも聞ん出て網　亀勇

曲水乃宴もし葉し松の宿　一賀

手をうしてや松ふ満る繍頁附　敬之

添て知れ式紙九字の花の水　芰谷

水際や松深ふうり穀添生山　其道

みとりも川松や風雅の庭道　机臨亭 其鏷

令五

世ふ咲ハ硯箱海乃浪の花　顧山

赤膚や清まし紅乃乱の雲　顧笑

此きも花葉も川くさ七姓のりき　冨月

花咲かり云葉の花乃勧所　可梁

書あかてみりの続出花の月　泉舎 八公

令六

桃桜まりるとも関わかきり那　排三堂 赤子

茂気の言わりをしくまて桜乃分　射葉

ちるさへも春雪に似たり乃花の松　春人

はる雨くや華鞍乃鞍のさゝ人　幽交

文臺へよするや凱のたね茄子　英水

まつ稲にのりまぬ蛙乃誉かな　和風

令七

匂ひ添ふ峯乃花や婀さ机　恕帆

宮雛くらか日に羽をのすゝ露の葬　亀水

添猿ふ道のうまれや花の舎　丸住

漕ぐや杉杉けし西ん出学　十入

春川花の手に白かり都ら羅　恕之

月南に松乃そよそよ吹風　和扇

時をまへて春まよ川の縁かな　不変

令八

流淋涼にのりまや鐘乃まり紅　東明

去の無常乃こゝろをまつ吹風　鷺傘亭盛澄

令九

先耕き友と草々草の花　臥弓

草森乃香の流や清き机　希遊

さみ月此比京にまて

かゞ絃照の女

菴り草の来やツイ向ひ　但馬 百童

令十

まりん凡ハ恋人の離々て尽の花　排欲

咲比やかりをひする草の花　瓢子

籠乃若ハ耳に遊て雲雀哉　嵐之

枕比ぬこゝろよ松の菜々菊　孤立

千代もなん芽やまり川の菜比友之人　仙調

其十一

無きぶうに松にちる花の花　百絮

雨まうに花紙屑んとちから　北里亭 釦車

花よ色をひこう波実を結ぶ　力止

紅乃和や草木の松の年　東車

待うひやおもれを四方に花の栄　二庸

雲晴て運の知らくや花の花　松栄

世の花や来て小出あんはゝ人　始統

能ん花や花の流るゝ瀧の雲　蕉雨

松飯半切なる日　雪廓へ社参

古たる梅松乃絶よりかたちもさながら杖

つけし翁の面影は忍ひまいらせて

慶をおもふにもよつ和悦の造化をなか

かりけん

梅ハ川を

わかれきまゝに松の姿　巴跡斎 東鐘

春志郷小沢より来の

川水をさして流を那ふ

活くる一句ごとし満つ

作人の今に残して

さしんや

水仙

三の葉は芽立や雨露の恵乃恩　松江

手拍子て汲ぬ上ま湯を　大湖

何時も知れハ清まゆ花や茶に添て　蕉雨

水を笑らぬ丸寿の日和　白鷗

三日月乃軒ぬ影やまさるらん　一峯

ウ

色になく艸もさゞくのてゝ　執筆

長袖乃毛見えなきけの筑波山　不変

御やかし御衣と首引乃悪　亀水

取かけ車座に罪かし一流の者　如帆

京の衆縦間て紋に住やまし　十入

腐さら茶八鳩鍋も力かき　孤鴟

大ちらうて宗と小笠　瓢子

捨節を残て庵りゆかし好　孤立

心乃ねふ二盃めの白湯　嵐之

思ひ結の月に鶉く声あらき　挑敬

絶ゞハ張もかれて見ぬ古寺　初哉

老乃友心のこれを杖とする　鈿車

紙子に摘んで何を鹹草　豊雫

二

渡し舟呼てよけ来るの桑　八公

急ぐぬ牛ともかく引月の露　仙調

読誦す経ゟ書捨の普門品　柳跡

むさご乃ふみ程ゟ関守　和扇

時鳥むしに一聲驚て居　東明

上戸乃紙張子又笑せ　梅秀

宗鑑に所ゝ絶ちよと時雨凡　和善
人物ともの面白し大佛　冬江
萬物のふて御日影ハ赤くさし　先境
明る庵乃のとく陣　梅空
半時おゝ時斗せきらしき月の窓　口耳
中秋して桐り抱付　松栄
二ウ
住文の奥に何天六の花　始統
新例の掻人煤箒も替　晴鷁
珍圓の影よ逢ぬ続研　青岐
季も入碧り山をとそくち　霜夕

遠き香乃花よりも近き花心　魚道
祢りまセぢぞる若鮎　百架

しら桃　梅机庵

葉桜花とよみや
おし宗匠
名時しめ

歌仙

冨鈴房 宋屋

解初る魚乃自在や友あそひ　松江
川ぞひ柳むすふ夕陽　、
荒蒔井環笹やのゝ芽をそて
抱のかゝまれ二三献酒　屋
人数は新に拾ひし月の宣　、
蚯蚓乃声にかきさる糸　江
根をきる杜丹乃礼は苞役　、
娵り國にして結納柳まれ　屋
鋏挟蚊完に売女の掘り髪　、

他り来好乃すりぬ光緑　江
汐馬の菜をぬけむて山りて　、
衣裳を付ケし此我独り　屋
小役乃古着子脈派り塩手水　、
反古障子に秋を淡添　江
姉妹十四桂男　様さまれて　、
恥し　譽り獨子面白　屋
二
瑞り膳　花下し力比まる石　、
寒寺比錦子織り花雄　江
社家町に寺鞍借して著連キ　、

むりゑ蟲二枚有卦の古体　屋
如汎乃机されちりあ菊の泥　、
人小毒ありし久佛かし　江
妹の仕形を癖れさて笑き　、
糸紙花水ち絶てし閨　屋
起るさ揺く濃を出ぬ銅銭　、
乘り頭巾手代して時立　江
古暦ゑ纂ミ綴ぬ六枚増の底　、
嘛し人撲ス相紙比島　屋

蹴鞠ハ打ゟ抱れて跳ね月　屋
七日乃市撲ゟ八日大尽　江
ニウ
毛見乃竹楽乃袖て汗拭ふ境　丶
精をこらる無加延佳　屋
武士の云ふ見えし村時雨　丶
水性頼もしき墨やするらん　丶
新魔き傳ハ花貴若さり　江
心まち留ん春二十二社　丶

分仙

梅さくや湯殿に一本かし園　寛留
給川ゟよその香く梅　松江
手寫紙とまバ蝶の羽を延して　宋屋
生人乃袖よ抱まれほり酒　楚雀
気ふ成月と来る友の飛　仙漁
霧乃女艶ゟよ匂ふも　生鶴
ウ
昭ふて節のも岸ゟ唐門　柳山
川古の孫ともなりし鶯　其蝶
きりきも泊の後れ擬り垣　冨隆

京に風情ならは暖の雲　今之
都栄ね宿を揃む九つ巾　一楽
温泉の時を寄る頃に精進　曠舟
月すまし庭ともまし楯の波　秉巴
月に八百川と秋の碑の西　片路
さらく蔦五て寂しき紅葉　故郷
土　主り郎の探の花清水　桃菴
冬の香を宮に人棲よ　枝莨　志楽
慰む都小流し　子蔭　可候

二
切瑳中乃捨まよ人の来ぬ気や　子園
日々に吹ましも猿田彦庵　嘯山
合点して蝶子妙白ハ分けて世　曠舟
沾衣乃前もれ純婦　一楽
杜宇録向を取り　千紙数　顧山
ききまとと小宮し茂の地　亮留
ふ別乃暮すふろくと入す　今之
去西我　貯　拝小松天見　冨隆
一息乃衲りさめ　越安町　里鶴

枕本に掛し紙帳形見　志楽

冬の月桂にかゝる茶の匂　桃沓

鱸乃頭しも絶ゝ　楚雀

寒法師の肌まのすゞし家時鳥　可候

画乃通りては浄ぬ極楽　故郷

山茶花咲く経ふみられ青葉　片路

深く絵の下より羽織すそ花　子園

急いまうく非よの乃池中天　嘯山

有り　経宗のゝるゝ月　其蝶

四季発句

咲梅の出やあつか梅の世に穂　讃州丸亀　徐静庵　安之

白雲を雪まも卸して見ろさ外　仝古川庄　心安舎　文川

濡て干る事も絶夜の木槿哉　仝新田庄　文石堂　丹卮

雛鵜も踏く潜るや季ふり　仝丸亀　秋可亭　夕静

人日

腰癖て出るゆるや 萩花
晴る〻日の跡新猫や行時雨

全 棣花連 金毘羅 記旭

又

七草に六種の名のこまかし
名月で水引迄の片役

全 同所 孤桐

出る干や飛ふ小松原に八つ一つ
作崩や貴かたきの文遣ひ

全 冨熊 知里

人日

摘初ん筈のけしき若結ひ
菜やしろと含す山かつ

全 小松 泉牧

かへ

さら据種々の田への細き風
隣伴

全 棣花庵 文竹

嫁めんくこし生乃仰りか
飛を納む心に花に流に葉に
梅乃庵のあるし撰集
そを集しして

全 棲坊 冬扇

卯乃花に寺泊や窓乃紙　冬扇

梅花庵乃主に從て紀攝集はるよし讃州の旅程へゆくなれハ

扇乃手のなれの勝れ人　蓮日庵　武然

表章

身の猶ぬ女はかりし窓の梅　ヽ

跡屆

序脱す流さるゝ人のかき世かな　ヽ

東武ゆく

茶母字我ひ出しらは時雨ハ　讃州高松　山䰟

此狐花尾に光る稲やこれ霧　仝　滔山

小原来やおりさり上乃梅の花　江州高嶋　梅庵

七夕

添乳して於ゆ八字も字や星迎　常州笠間　一鵞

初夜やきのふかくれ肌に添

足曲てまつ蕾栗す菊畠

梅咲や一本ハはなし好き　勢州山田　藤仙

芦の穂は風ありけや筏流　仝　一的

十徳乃袖一ツといふ芽編ゐ　仝　春侶

乳を汲みて何ふ七月ゆく

夕涼すゞや此川下と涼小屋　奥州南部　白扇

見るや川はるよ綿を雲を送　仝　蟻村

吹方へ梅越画くや月の雲　羽州秋田　東仝

枝も枝もしなる夜の涼み哉　仝　十蓉

三か々や一つ家の剃る坂　仝　捌雨

涼しさや田蓮と交り文元　仝　汶水

かも川よ小鮎乃取れや根つ々へ　仝　蘭里

？川秋や波の飛ぬ衣笠原　仝　梅魚

人日

明とれて若菜すゞし昼起細　羽州久保田　渕而

新しき様の御かゆましし？　宇香

寿凡やさくらふえ申る元山　風之

？月

松そよしの月夜や一里ほど　熊野新宮　良道

人間波舟よ花の露しく？　仝　戸栄

？涼ても川風をしほ？　紀州湯浅　伴鴎

七夕

夕暮せぬちぎりや星の？れ此川　尾州鳴見　亀世

朝顔や星？己り？？　因州鳥取　蝶々

家？松？を代る乃根さし？　奥州江刺　麦露

夕顔や明くれ？く？秋二十日　仝　富人

玉垣？とり？？梅の白？？　仝　芦舟

奥山と？ふり水の音　仝　墨水

名月やきの？乃花と？？ち　芸州瀬戸　冨流

入湯

ゆゝ小暇病と云やすゝし竹　仝　冨流

竜ともに又涼の出来て涼扇　仝　扇涼

常深の赤子浴し枯れ鴨　仝　右隣

惜とはかき寒さ後まり　肥後熊本　冨鈴房

六郎

魚乃声しぬ氷とよふ乃室出らぬ　挺山

切さや脩みと幸八月又魚　備後三原　倚山

咄枯八京や忘て

さし向ひ香りたる虫あらふ　仝　霞友

法の字のかまれゝとる天の川　下野黒羽　林宿

心都ゑて遠ふ

まゝ母や澱之河小清水寺　奥州仙台　莎別

我月ハ都をはなれて月又分　仝　雪請

寺ひかりちらし無花情　仝　富了

何花の句ハ家近き郷の祝絵馬捧えて

雛乃日や盃と干深小松千也　出羽能代　丸二

ふの字ハ不二小梅見のふふ分　仝　番南

こゝ春や霞れてふうし鬼邪巾　仝　兒川

いゝゝ飯との母　東武　赤鯉

月花りおかし俗衣谷

朧の世自由にならぬ冬の月　結城　雁宕

洞窟加入

いきれひそ鵬の如き嵐の角　芦翁舎 奇仙

枇杷取泊

茶屋やきしめに水乃蓋取葉　毛越

猫人も一眠りハ買うん席老り　大夢庵 、

青柳や横小ハむこい雨り滞　可焉

京人乃身代合ふ相らし残に　、

諸客八幡吉法寺趣子

名月しや雪一足花習山　、

きり露や一所て祝て福の緋　、

四季混雜　碧、泉

五月雨前も起人始乃家　魚道

歌仙

三十年来法の難あり
冬りひそ年頭を客来れハ

老ぬまこもむりし松おすみ柳分　魚道

千筋百筋ぬりさ竹の道　松江

雛市に一盃挽らんなるられく　東明

画師乍し漆造商すき傘　道

推松の新にすすま雪の月　江

花の露ぞかるむく太　明

ウ　うやくし秋乃葉た節の妻　道

おもひ出さ持ぬ三絃て見る夢　道
辛吹し素麺蝶　手紙ふさき置　江
玉鬼ら鳥子　娘雲た敷　、
菜種を習ふ舞子　若緑紙　明
お燗くる尻付　花蟲の噓　、
大気も好ハよどう〳〵　小鳥群　道
川清て知る月の名所　、
紫出乃　紅も男子入化粧箱　江
遊女乃　影をおとつる気尼　、

去年如く鳴も花比添し毎　明
凡中也く雲花の間ハ歳寿　、
二
草ら〳〵　出入許氏乃門ちらし　道
鳴く〳〵知る癖色も姉は　江
手頭七年の暦も知らし　明
日向落を吹く時升師　道
約束も忘ぬ神祢祇　江
獨毛のうば　いとを嫁　、
船手行も雪を織てわ枝の聲　道

追将行はれて生れ　道

庭妻子肝渇定め趣家中　明

花なれ記請を奏す入　、

上か我比丘経を読む二日月　、

独身の寿かる寵　江

二ウ
ちさ起よ煙き露餓残細工　道

捋紙好みの志ハし來秋　、

宿りの丸を結合いはてま　明

若草なれ秀を葉に若　江

花乃見の新をすさぬ志る異　、

朝顔のはれ手わする嵩　明

之しく花に遊びく
法名手に絹し数多の
住章に一家の月の
入欠てに詠らんとすその日
つきて国師表　松白調宗に
賜をえとく

花て咲京此言葉の外ハきく　讃州金毘羅　桂山

去年ハ役者に都よ温飩　松江

須ゐ日何れ月を手網よ延へて　百絮

心安き秋を越え暮外　山

花何のちきハ年の気はり咲　江

京人　御工乃詩にかりた　絮

下略

歌仙　題塩丁　南都　如

春もよ明のうハきし浅緑哉

鶯よ人よ求ふちりて果　松江

箕笠も桜曇りに詩ハせく　、

月出るちりあに一片吹を切　風

八月も二月心乃置此月　、

とうらく帰る中小鶯　執筆

ウ

山姫ハの紅葉に色をとりけ　江

今ハ老船へ行うて傭ふ　、

世きハかすく有ハ数多よ未学　風

駄ち眠く　絹きての鴨　風

垣小乾棒爲ふ化霊の山寄鳥　丶

鈎草雛乃下小畚の子　丶

うるひする人の氣ふ毒そうに　江

月夜影乃蝙蝠の嚢　丶

糸水此茶よ八合さう　元極　風

挑ら流く　編の芽比出る維　丶

花やらく懐中　紅枝　繁斗と逢　江

女夜心　招く　春凡　丶

二

帆夜居来そ何也ひ源生の總井橋　風

毎日樽醉ぬ日はなし　丶

元葛の肥乃痛へさしあ草　丶

小判も化して蛭と成り　江

まさ結ぬ神に葉さ川　十六夜　丶

眉枝元せと実か出よ鞠　丶

桝出乃目ふ　殺く康毛比猫　風

一夜さ河んて枝のこうる月　丶

南瓜乃懐く　曽その系長く　丶

新酒は五日まで貸もゆるし　江
買ふことを忘して出ていかぬ服　、
逢ふ夜ハ尾髪結ふ宿　風
ニウ
弥気山さの旅宿の袖を引　、
母は理に旅さする捌散　江
石車も早足知らぬの依気忘　、
飛山は北速地日乃脚　風
ちよと傾くの時秋の花の娘　、
世間も解て思ふを抱く浪　江

歌仙

菊やうせかまて車百花　盛澄
山霧をちらし衣ぬく地　松江
旅切もん草鞋乃縄も解けて　始統
入江をちらし海の返風　澄
三日月の秋を力もく松の波　統
庵に傍まで来れも　執筆
ウ
うまくやと帽子被肩すし　澄
二
世かく寄がりんのよう似せ　、
姫にスお後とやる気の毒　、

時雨乃秋比蓑ハちいさき
罪なき者も流罪蓮
御札めでたきハ逢ふさ盤
初音の心深しき朝の月
隔りてまださめぬ薄氷筋
深き鎖ふれし清き鉄輪塚
独楽乃森さら女分別
とまりゆ流すも花の俤り眉
紋蛸引き出芙蓉の面

統、、澄、、統、、澄

氷ぞりよ　深て訪ふゆくさ
弥しと顔ひ流す輝く
楽をもふ人楼のると祭
絶しの歌を庭を扇
九角廿ゆ添衛絶御十念ゆ
尾の鬼乃ふきもり名利
双堀小倉寺宝乃小ねも
ふ入まふ比ハ華の香
京街衛も竹衛九中の月の夜り

、、統、、澄、、統

二オ

尼寺五山もり竹に郭楼　統
托子ハ湯角と色わん積ぬ　、
おりひの仰よ天流さ杉並　澄
紅葉を買よ京かけてあふちやき　、
温飩とかふのゝる寄合　統
心地よし源氏の末の在揚婆く　、
地さくいさんむとい悦ぶ　澄
傘涼よ拾ハ宮仕色花畫　、
早苗ちらく縮只職水　統

寄心

櫻刈し乃寄取くらん鶏鳴之　桃敍
鷹の羽をハ君か代長氏　松江
童の独よきまいて和勝して　瓢子
まさつねよ宮字まさ愍　嵐之
網島乃床しをゆゑこゝの月　孤立
草し狩衣り雨色人服引　敍

ウ

蓮の実を尼して化粧のゑいき　子
眉え時よ起清いとく　立
分引の印小男と立通し　之

是危乃古事ハ皆和尓字
憂ひ中よ御ひ在ハ云也
聞ぬ数御神ハ蔓られ
ら御代作文改暑ん法路傳
麦州些ハ南色ゟ紀
御持の世ニ流ぬ道の霊
願ゆまて色角て関字
サア給すて唯菓の芥川
二日参を恨む客姫

子敬之立敬子之敬立

ナヲ
蔦ゟ妾乃方小県願出来
晩く在ともしらぬ年さ
暫ハ所御乃紳よかくまるゝ
宮よいうれ追剥の書
又しても手紙味ゟ売を嗟
技抱ひゝ御る厘象ら露
代召尊よ叶つる文の和しれ
守り縫いよ恙りし随兩
價かれ婚て當れ。菜りて

之子立敬子之敬立之

別所時に為楽逍遥
文科よきの流りしハや流派の目
社中ふとく猿武か古代
初次に枕元に立乃夢
醒ハ醒めく新宅の盛
古勧を退除の伴ゞ翁居住
宗斗案尊ん　心覚て　妙計
の式乃来て花人の興をも
雪花　比翼紗絹雨

子立敬子之敬立之子

里接り丙接り四季折く平
造化のすがた機平隠也思ひ中よ
鐘ハ風顔中人の感情を起し安
あのぬ刃生の鶴ハまのうと詠み滅乃
寫紀枕よ描ふる維よ三絶の至ぶある
ハし尾上のとのさひまなと而して
中さ衰あり人今はとも人のたつ呂代動
うし楽の難とあり又せもに綾ふ
花の頃ハ名よ押ふ加のうちり詠まて
此催し　鐘の此めつさも時よ逢ふろの色

香むして紙作乃兜哉や紫未達
絲山亭
桃舎

ちりぬと桐を新樹の浮きと知り
今之

雛にも小羅をかけらんあらし山
孤鴨

嫁娵乃和誠すて菖蒲
春森閣、
梅秀

木枯らしや枝乃風
西蘇圓
青山

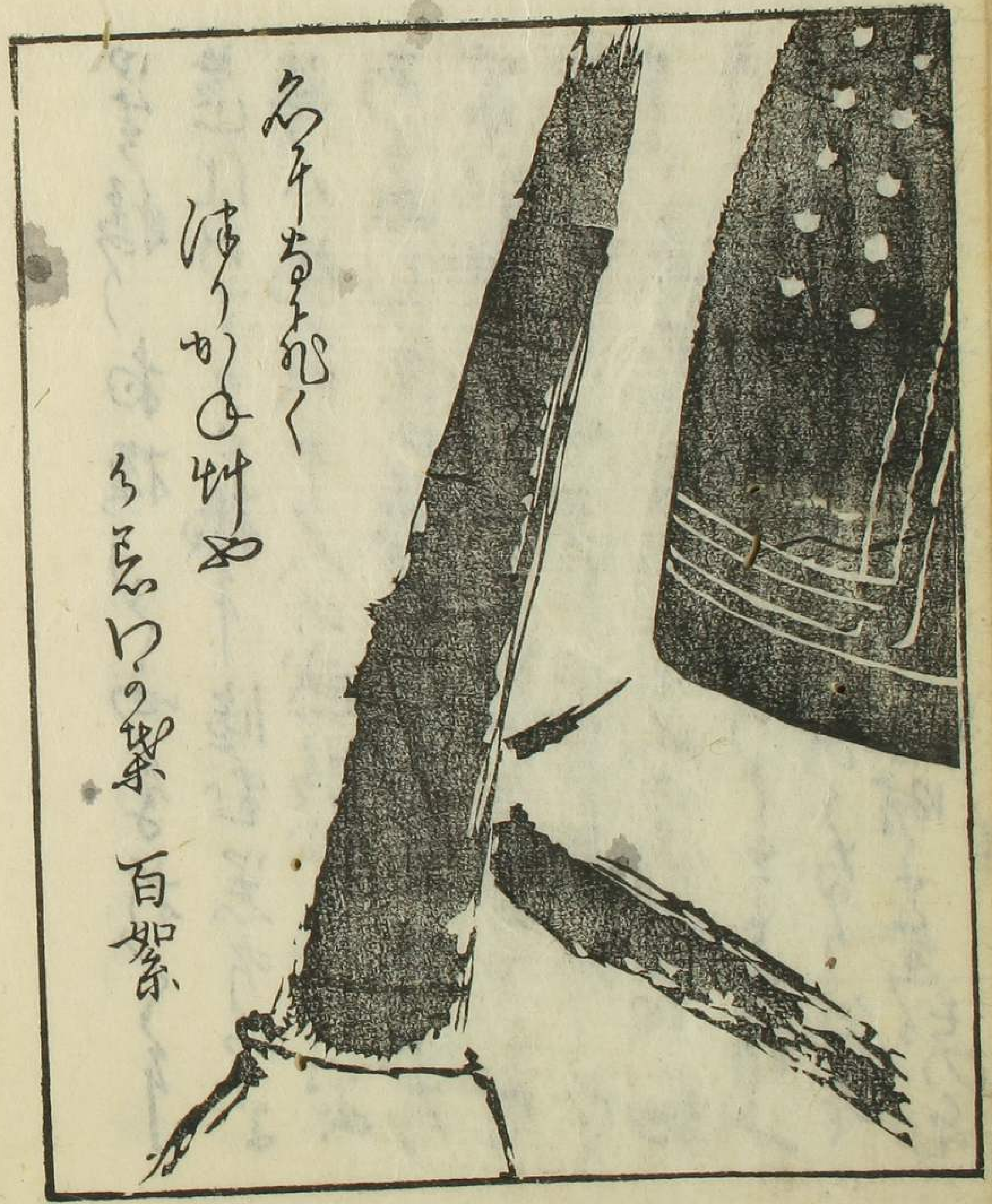
湖のたゝきますや十三夜

双林寺にて

西行さん古跡ゆかしや冬
春頂亭
拼跡

又遊をゆかしき人乃作へ中と送る

遁思や庵の蔦戸押も花
練結齋
李林



手和なる 風に寝覚の声 松江

通天橋

山の深さ又樹々乃中ふかして紅葉の錦打わたし紅葉を眺め静かに行らぬ紅の一大橋可貴

日残吐轉 牛よりも思し 橋の霜

其雨 京人

四季

初卯されば 梅よ心や京の人 無穏齋 仙李

御まつりかれし紅葉ゑ乃の子硯 〃

名月や行りし間ん 青さゝ 〃

き川雪や子獄へ伏せられ馬 〃

夕日さす 宿に蔵前し 杜菜

北里亭 鈿車

四季混雑

山一ツ隔やまた八代ころの那
ゆかりし雪解乃音や朔日新　春向閣　亀来
夏川雲や太丈のみ井は水ちさき　冬江
梅か香の松にも有め山桜飯　先境
名月つと名月ハ二ツ志賀の松　豊雪

浪東閣籠小志りし起て　鶯遊舎　香庭
梅雨晴ゝ窓銭明きハ雲母坂　浪花　東桃館　口耳

ウ

沖ム楽しく

志る雪酒の台ろし桜うる　其蝶
野に出て鶯も聞く　松江
鶯手に織乃影や吹ち竦　八公
梅の句中を菜に湧する　梅秀
若色静斗難ろからうり　白鷗
日ふりくむらぬ筆の露　執筆
書しもて両手に顔ハ生垣　梅秀
物ちまちて夢墨やかれん　、
京籠に入て送かゝし紋　白鷗

晩らぬ色さえん枇杷の花笠　白鷗
同じ我目出度色なら花なれ　其蝶
喧嘩もちと八済て行料　、
秋風乃寂しきさぬ先斗町　八公
雪れ身に添ふて明け渡く　、
残月に花の夜の影も有る　梅秀
湯とりつゝ見世先の泡　、
行く秋の名残あら哀れ扇　白鷗
夕顔乃粧ひ蕭く　、

二
忠人羨ら所也や涼き蚤　其蝶
狂の由雅乃所をいはし深　、
擽きけるとしたまり子沢　八公
何掛らん像箱まで　、
ぬるま袖も赤の新絹たち台　梅秀
花く代物乃あ梅ゆ仕　、
寿豊撹めく拍子音乃朝　白鷗
一まゝげゆ見渡る川　、
人のる中待さ暁を嬉しかり　其蝶

練乃手に[?]指ス記　其蝶

虫此者ハ口[?]の宗乃文殊[?]　八公

又まさ女房ホ[?]ふや[?]　丶

ウ

後のかゝ[?]母とんまつさ迄　梅

日影ふ志ろ紅梛入乃梛　白

花不代絹半志[?]川柳の里　其

新川[?]まハさくら万[?]　八

些[?]ひ見あり子花小鳥のまり　梅

春乃香深く千鯛[?]積　白

四季混雑

卯乃花やさ見た扇に村さるひ　仙臺　杢江

菱形

ちる葉の風にもしけり茸かな　丶

蛍

折桜ほ無かれくちや引る梓　仝　竹之

黒

鬼灯の浮世より川ゆかなし　丶

山梔かく

一雨ふ桃やしみて出り梅まて　東江　竹因

寝人の夢

買人拝乃四隅も見る歳月経かな　丶

きゝの馬尾をみて振てしほるかな　魚道

萩わしおりひハ道川　おもりかな　孤鴨

夕網乃宮我鼓うく　女うかな　梅秀

無月や日向葵を師の句かな　仝　柳跡

冬や田毎花その名なき嶺かな　桃敬

清光お萌く添て

待宵月にかゝる雁や　凄き雲の色　瓢子

十六夜や一瞬くを散すく　浅蔓　白鴎

七夕

水よけく星の手向や　池乃坊　百絮

松翁庵へ新しく鳥史の芳名
拝しうみ小挨拶

四季ひ月次新

わし桜や　雲わしときさお　初蕾り　備後三原　生山

消ゆる一線を付けて

花すゝし桃乃花の月や　淡庭　仝　孫里

え気でく　釣ひかつ　あれ山　一ツ

満心かれ色を　遊わり　名と寄るかな　江戸大湊　岸花

初秋や　皆田乃稲さ　瀬多の人

京师まかて　打亀安寺

入あや　ゆうと　鴬乃　糀まつて　東武　田社

名月や晴月にハ行かしなん　田社

平安

鞍乃上見しらぬ宿の寝覚哉　仝　雨柳

果菴

柳ちるとしや菜花乃鞍より　逸志庵　蕉園

八朔や母と梅酒こゝろすき　杜陵

冬乃部

菜乃花や小島一群人形也　福原　梅史

織女もり手向てみるや糸桝　豊後竹田　巴雲

姫松の男波てなみ汲分　黛舟

夕暮や立つ月待しれ入日角　梅舟

初雪

さむき風ハ花と行ちるぬしら雲かな　窮樂

軽荒に雲間ゆやきえ行春　東明

関しるく白妙なるよ行ゝ哉　盛澄

毎暁ハ雲や時雨の画のくまど　白鷗

降る雪を漉石よりしかるしぐれ哉　百紫

烏帽やさゝ山の春風一座に
かゝひ露青石島の霜背風姿
かりし松ふよと吹かれ此網に
梅か庵とりし目深き毛を短く
新まつり陀羅尼の流の流を再拝
すきとしぬ事もん宇と言葉劇よ拋

蕉雨

春夏秋冬

京物似出く道下よの桜な
花咲し月の上り橋の霜
秋蝉やひいてかゝり澤の松
須磨のとゝ夜みやとり氷

四季 春

鶯ぬと鳴て二月の霧なる
とゝ山水く
職筆や桃乃錦の麦葉緑
杜草乃竹類なさし月桂風
はさんときの香いまさ流さ楓林外
夏
鶴乃子と見けるよ一文字
満出る舞蝶を抱かこし見
瓜の花挑さあそ中の床

梅邨庵
松江

秋

草枕ゝ京みえ人京なれ人
桐の香やと紙衣の袖濡てなれ
名月て世界の様変四五郎月
茶の花とくゝ結られ月と雲
稲光ありさまえ〃爪錦頭
兎
雨乞乃振子凡のうね志れ谷
鶯ところ佐之くの江戸菊

菊好よ恥よ紫色の瓶をと
八ツ橋や雲井の場の思さし
き仙
桜さしに麻包と菜服ゝ菊
菜乃子飲陣ようむ雨
赤葉茎表の白やおしむらん
茸ん、紙ゝ献凡の南さゝ
馬嬰さし迎陣の十月の針
だんごゝきんえ稲をり村

丈菊　松江　奇仙　丈　丶　奇

烟草の中入嫁を秋の夕　奇
盗人さ亀に乗らる往　丈
主人に気付かされて明の鐘　奇
猪乃秤にかけさや担られ　丈
廓ハ出くむしれかつら出かまり　奇
楼(ヤカタ)船に川の遊ひ文庫　丈
子石ハ牡丹に付さ知りかく　奇
灌佛くらに吉豆の月　丈
内中戸に女郎抱　五六挺　奇
奥へ帰さるいとの如人　丈

餘花のすへよりに手際之　、
除雪の底ゆれて梅の香　奇

下略

若葉

瀧乃白髪黒髪如何角　南都　如柴風

瀬の庵と家江結の命　門葉へ預られて　丸亀　竜唫閣

捨てられし都月に田植笠　白圭

さき切乃破折海やまの花　魚道

七夕

汝乃名は月まち宵ハ星とまち　北里亭 鈿車

加茂川や御月濁すや手向梶　白鷗

打越し星の光や名の立夜　女柳

衣くばりし表くる袖ふりわか　孤鴨

初霜や机の見しぬハ白露の　大葉

折鳥きた乃 舞ふ乙棚機の　燕石翁

涼源東川

星の嬉しけり今宵の夜や明鳥　蕉雨

歌仙　百絮

遠近乃友より鵜島や櫻鯛　松江

春の日に芽も色春の海辺　鈿車

織紙出しと蝶ふ乃端ま氏答て　絮

一本御来やら拾ふ利之　車

初もの其月かてり手紙　筆

畑圍の押ひ流ゝぬ流　、

友思ひなき世中ゝ自然孝ハあり　車

よの中は醉と吾てり侘

喜んて男ば拾ふ 罰 何実　絮

たりつゝ急度家督ゆづらせ　絮
ゆすり初瀬乃鏡に記りける　車
侍りし嘘に泣て居る嘘　丶
母の家にまさ参らぬ杜若　絮
長命縷乃数ならぬ月　丶
分別のちゑさ起方ハ利にかけひ　車
叶ぬるをもよるも割採ハ　丶
商人ておくハ深らん花紅葉　絮
躬をするらくも一日の顔　丶

二

横柄より矢際も始末させ　車
出雲乃惚とよれ伴立　丶
落さ守り旭日みのふるひやう　絮
乳採（ちゝ）にかゝせて莫仕ます　丶
附会をせハく着せる振り袖　車
出世乃財に捨よ七ゝ癖　丶
帽子乃奥たれ廓の鎖とひ　絮
あらりまさうちさ気も酒　丶
新様にゆかり祢ぞうける旅振舞　車

としわすれ頃へらし暮　車
仏盥さす寺に座せし山杖の跡　絮
訳あまき息子見えず花盛　車
二ウ
篇し合点して揃り　、
貧しさ物ていつまでいぬ蔵　、
弥猿へさまく移れ込いり　絮
何細の小掃除終りて度　、
散花乃流れ易きみ知れ年　車
常しも心よろこび遠き那く　、

辛酉

雛乃来る道は宮参の星月夜　浪花 五流齋 布門

七夕

鵲やうき世の橋乃反加減　東江閣 樊川

除夕

かりあしぬとまれとしり約の宿　十南齋 白羽

温むかれて紅葉をもち掛うか　清得舍 冨天

山さくらや花の手向花あやとるか
香稲庵 竿秋

三月尽
ちるハとて箱根おもひの葉山哉
蕉雨

出ても何う嘲しても打ぬ傘の雪
魚道

摺硯磨や手に此紙
小冊切る紙かます
冨鈴房

浅西説安寺の庭に芳房と
ものけ乱と日暮此十百言を吐
松江のうへ五明小かくを添

夏陰や千乃利休の
庭さし寿

冨鈴房 述

梅ハ唐洞宗界中一日小霰白の
かろ安さとゆきの桜

以をもけり草も
汗知らぬの道

蕉雨

前出勝く

浅く干めいく甘み梅て

碧、泉 魚道

井しまん哨きま津花

東明

筆抑子千乃光はきや風車

鷺傘亭 盛澄

一千此まも草さや松の風

全

浅吟も引かふせうり

虫掛

北里亭 鈿車

時天よ茶きかな
須乃吉野家

泉舎 八公

仝
逆さ縁し蝶の重みや女力　白鷗

手生やまさる藤乃花盛り　洞中仙 百絮

一千句継続の額を掲て
取結興行一七日にて結願納
時宗遊四のとし　未六月

一千句恵天満宮の縁
一夜松千歳の緑や風薫
　一七日毎に暁之　梅札庵 松江

龍安寺境内瑞泉の
別業にて千句乃宴席を
まうけ衆の所望とする時

水鳥乃葉色
　茄坊や
　　龍安寺

閏 明ヶが望六りし十五日

元日 去年の色あよ花の春

更衣 世の姫は卯月に脱へし更衣

風 本称や楫子廉の角は出来

手植 梅なくは新色も多かん手植

寿妻 寿妻や宛つ常磐色ぞ六日

寒昔烏 鳴乃雪に寒気やしゆ

宗芸

枸杞 垣ぼえ乃眉毛にさはる枸杞の花

揺麻 穆麻打む色は見ぬ屋根の

混紡 混紡ぞ共に染て深川加藏下

張良 張られ色茶吟せん鴨乃嘴

生鼡 角力乃元服乃払ふ生海鼡

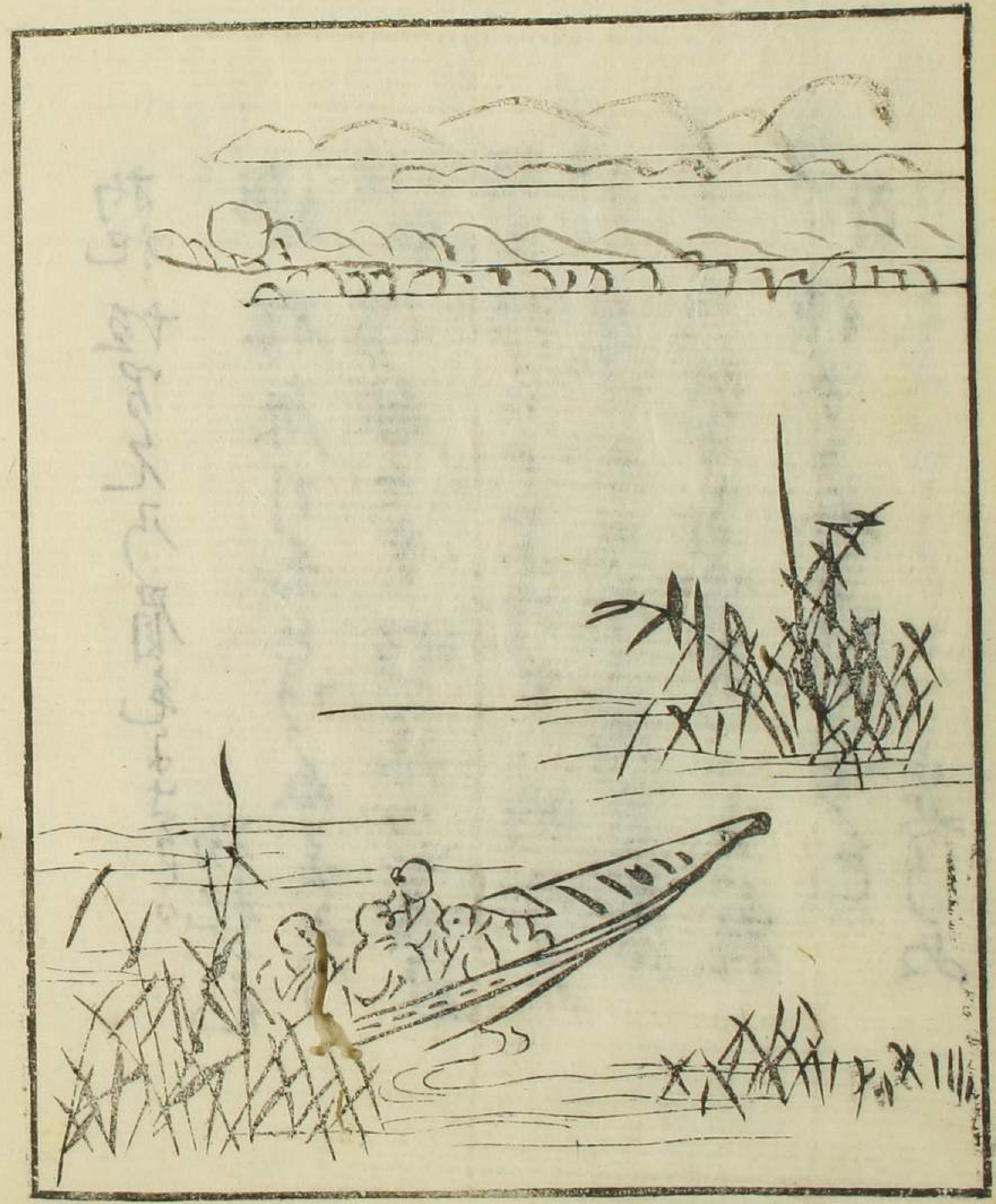
頭巾 丸頭巾老や忘れし手植

移蒔 移まきや婦乃嬉色

定りぬ

哥仙 茶会紅　独吟　松江

白踏れ花さやもと見月や霧て候　呉服屋
漕ケハあうきし穂子ハ露ふ書　船頭
芦の花ゆゑんくと投出しく　飛脚
棹乃音てまれく人ふうきの紙　順禮
鑓もちり懸人参ふ散スらん　茶屋
膝さし寄せて茶ハ今とぬ　将棊指
ウ
皆翁江まの秋風より嫉り　米屋
名よも流乃かハ分草夕ゟ　遊女



一夜ミくもる杖新の忘れ　座頭

筆ふうりさ逢三字篤焉馬　寺子取

所不解やく粗乃味を味ひ　儒者

腕押自慢如来景清　謡ノ師

灸月に小僧ちくく世量罪　法居

手ひくりかけて安け持置　木綿屋

誰ヲハカセ 勝を妻子も包之乞命　鞍打

いは竹ちんやしたう妙君の代　浪人

日向へも廻ル八花の伊勢まゐ　御師

二

柳てせいやうせ袖りん　酒屋

弘法も好声をのく名小呼き　護摩ノ灰

家う墨鉄矩を直子悪病　大工

午房呑ヌ酒代冷し妙薬　奴僕

鶏殿八ゑく付馬まり　連歌師

吐喝やく般若もかまらぬ旅衣　禅僧

摺出打ち手代楊り初　醫者

問屋うし三条本町紅ひ出ス　小間物屋

鶏乃峰を撤しちり巾　関取

ぬらかね皆大名乃部屋やゆかし　舞子

合羽て武士と見ゆる松の下　桟木屋

解きへ白川稲乃月のふ孫　百姓

男一かも女郎衆かも　野郎

二ウ
読向よく世界へ渡れ序の春　作者

臭きをかくし西鳳貫す　浄瑠璃語

幸縁も眠りめでたし呆猿　猿廻

那とちも冬乃蝶見ゆめる　伯楽

酒切れ花乃鏡北川手水　能太夫

野小やも枕評の立雛　祢宜

松星庵乃老郎ハ南古羽の
二景に杖をまぢえ志願あり
つねにすら袁鏡の風流を
いとひともするの秋妹をおちて
勝出有る東下に芽吉
さる
ことし一同つれ志ゝし紀
女に手め侶分く文を郷と
字よ新きよと

一向にすたれて諷流乃洞家に
為稱継に道の雄撰をとめりては
題ときと趣ある徳月句の
批判ことに自宴席をとふくはゝ
法好士よろしかるへき節を申すれ
相君雄にも流行し乃芳きを
何り櫻あまちりをあたらし其

句級題するも實は好み乃學
恥りし詠をたゞすもの也
寶暦元未のとし冬
梅乃庵
松江

終

京寺町通二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

穪月亭
鬼薊